

国語問題

二〇二五年二月五日

自 一一・三〇

至 一二・三〇

答案作成上の注意

一、国語のページは

国	1
---	---

から

国	20
---	----

までである。

二、問題は

問題一

から

問題四

までである。

問題一

問題二

は全員が解答、

問題三

問題四

はどちらか一題を選択

して解答すること。

三、解答用紙は、一枚である。

四、解答は、すべて解答用紙の指定された欄に、記入すること。

五、受験番号は、指定された箇所にならず記入し、氏名その他解答以外のことを解答用紙に書かないこと。

問題一

次の文章を読み、問いに答えよ。

明治のはじめ、外国語によって日本語を変えたが、正書法だけは手づけられなかった。そして、そのまま、学校教育をすすめてきた。文字の書き方にはつきりしたきまりがない。

おもしろいのは、戦前からの法律の条文である。たとえば、民法、第二節、第四条は、

第四条 未成年者カ法律行為ヲ為スニハ其法定代理人ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス但単ニ

権利ヲ得又ハ義務職務ヲ免ルヘキ行為ハ此限ニ在ラス

となっていて、句読点は一切なし、濁点もついていない。^Aこれが現行法の条文である（平成十七年に口語化、第五条となった）。新仮名遣いによって育った人にはたいへん読みにくい。だからといって出版社の校閲の^①ように、統一^Bさせることができないから厄介である。不統一、多様を許容しなくてはならない。

戦後に制定された学校教育法などはまったく違った文体である。たとえば

第七条 学校には、校長及び相当数の教員を置かなければならない。

という表記である。濁点もつくし句点も読点もついている。はつきり明治生まれの法律と異なった文体、表記法によっているが、正書法の考えが確立していないから、統一^Bすることができない。それで実際に不都合がおこらないのである。

仮名遣いは一種の正書法であるが、正書法ほどの^②コウソクリヨクをもっていないから、戦後になって歴史的仮名遣いを改めて現代仮名遣いにした。^C多少混乱はあったが、とにかく切り換えられた。

日本語に漢字が多すぎるといっているので、戦時中から漢字制限の考え方がつよまり、戦後、a、ついで、bを制定した。しかし仮名書きは認められているから、正書法とは言えない。

近年、ことに、わずらわしいのが、年号である。平成二十六年は二〇一四年である。公式には、平成二十六年とすべきであるが、新聞は、二〇一四年を先に出し平成二十六年はカッコに入れている。横組みだから2014（平成26）年6月20日と印刷される。ダブルスタンダードであるけれども、おかしいと言う人はいらない。

住所表示でも数字が多くなって、まぎらわしくなった。

二一三

というのが、手書きだと

二二二 / 一三二 / 二二二 / 一一二

などと誤解するおそれがある。それで、

213

とすることが多くなった。和漢字はタテ書きするといく通りにもよめてまぎらわしい。それをさけるためもあって、かつては改まったときは、壱、弐、参などと漢字を用いたが、いまは使われない。

算用数字も書法が安定していない。このごろは、10年と書く。かつては十年が慣用で、一〇年、10年と書いたものであ

る。数字の表記はゆれている。実際に不便を生じているのだから、正書法が必要である。

日本語はもともとタテ書き、次の行は左へ書く。本は右開きである。

ところが、横に書くときは左から右へむかって上から下へ行をかさねる。

両者は別々のルールになっている。

それについておもしろい話がある。内田百閒のズイヒツ^③に出てくるのだが、鉄道関係で雑誌を出すことになった。左書きか右書きかで、やかましい議論になる。誌名は「汽笛」である。この二字を雑誌の表紙にのせようとしたのである。それを左からにするか、右からにするか議論になった。さんざん言い合ったすえ、ひとりが提案した。いつそ、仮名にしよう。「きてき」。これなら右も左もない。左から読んでも右から読んでも同じである。一同納得、それにきまったというのである。

英語などでは、こういう芸当は考えられない。正書法がないおかげである。正書法がないために、表記にいろいろ変化が出る。

漢字と仮名を混ぜて書くのはもともと無理なのである。正書法でしぼることは難しい。漢字が制限されるようになって、印刷物の字面は、仮名が多く、見た目は明るくなった。しかし、困ったこともある。読みにくいのである。

小学生が、習字で「ははたいせつ」と書いた。張り出されたその文字を見て、その子の母親がそんなに親思いかと帰って子どもをホメると、こどもはきつねにつままれたよう。母親は、「c」だと思ったのだが、こどもは「d」のつもりで書いたのだった。

仮名がえんえんと続くようだと、いまの日本語のように続けて書く読みにくい。ヨーロッパ語は、いわば仮名だけのようなものだから、一語、一語、分かち書きをするのが正書法になっている。日本語が分かち書きしなくてすんでいたのは漢字まじりの文章を書いてきたからで、仮名がふえると、読みにくくなる。

それかといってわかにかち書きにするなどということはできないことではない。分かち書きに代わるものとして、読点^④をふやす書き方が広まっている。やたらに点があつて、うるさいとネンパイの人は言うけれども、なければ読みづらい

のである。もともとしっかりした句読法がない日本語だから、すこしくらい多くなっても目をとがらすことではないかもしれない。

正書法が確立していないのは、かならずしも日本語の欠点ではない。むしろ、そのために、表現の多様が生まれていると考へることもできる。正書法などということばを知らなくても日本語はりっぱに書ける。

出典…外山滋比古『国語は好きですか』大修館書店 二〇一四年

問一 傍線部①～④の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部A「濁点もついていない」とある。例として挙げられている「民法、第二節、第四条」の中で、本来であれば濁点をつけるべきだが濁点がつけられていない箇所は何箇所あるか。

問三 傍線部B「それで」と同様の意味用法で用いられている文を次のうちから選び、記号で答えよ。

ア 歓迎会はごく簡素なものであった。各人、自己紹介をする、新入社員へ歓迎のことばを一言二言述べる。それでおしまいだった。

イ 山田さんと林さんが教室で言い争いを始めた。それで結局どうなったのか、とても気になっている。

ウ あのレストランは味も悪いし、店内も清潔とはお世辞にも言えない。それであの値段を取るなんてひどいのではないだろうか。

エ 今朝は路面凍結で事故が多発しているそうだ。それで彼は遅刻してしまったんだと思う。

問四 傍線部C「歴史的仮名遣いを改めて現代仮名遣いにした」とあるが、次の中から歴史的仮名遣いから現代仮名遣いに改

められたものとしてふさわしくないものを次のうちから選び、番号で答えよ。

① 「ぢしん」から「じしん」へ

② 「あはれ」から「あわれ」へ

③ 「言ふ」から「言う」へ

④ 「いづれ」から「いづれ」へ

⑤ 「をどこ」から「おどこ」へ

問五

a

b

に当てはまる語句の組み合わせを次のうちから選び、記号で答えよ。

お	え	う	い	あ	
教育漢字	教育漢字	常用漢字	常用漢字	当用漢字	a
常用漢字	当用漢字	当用漢字	教育漢字	常用漢字	b

問六

c

d

に入る語句を、文意が通るように漢字を用いて書け。

問七

ヨーロッパ語と異なり、日本語が分かち書きをしないのはなぜか。その理由を15～20字で書き抜け。

問八

日本には正式な正書法がないとされる。このことによる日本語の利点を13字で書き抜け。

問題二

次の文章を読み、問いに答えよ。

ある日のこと、こまどりが枝に止まって、いい声で鳴いていました。すると、一羽のすずめが、その音色をシタ^①ってどこから飛んできました。

「いったい、こんなような、いい鳴き声をするのが、俺たちの仲間にあるのだろうか。」と、すずめは不思議に思ったのです。すずめは、すぐ、こまどりがとまって鳴いているそばの枝に下りてとまりました。そして、鳴いている鳥をつくづく見ると、姿といい、大きさといい、また、その毛色といい、あんまり自分たちとはちがっていなかったのです。

すずめは、考えてみると不平でたまりませんでした。なぜ、自分たちにも産まれてから、こんないい鳴き声が出せないのだろう。同じように翼があり、またくちばしがあり、二本の足があるのに、どうして、こう鳴き声だけがちがうのだろう。もし、自分たちも、こんないい声が出せたなら、きっと、人間にもかわいがられるにちがいないと思いました。

すずめは、心の中に、こんな不平がありましたけれど、しばらく黙って、こまどりの熱心に歌っているのに耳を傾けて聞いていました。すると、またこのとき、このこまどりの鳴き声に聞きとれたものか、どこからか一羽のからすが飛んできて、やはりその木の近くの枝に止まりました。

からすが、強く羽音をたてて、飛んできたのを知ると、こまどりは、さもびっくりしたようですが、やはり知らぬ顔をして歌いつづけていました。

すずめは、こうして自分たちとあまりようすの違わないこまどりが、みんなからうらやまれるのを見て、ますます不平でたまりませんでした。ついに、すずめは、こまどりに向かってたずねたのです。

「こまどりさん。どうしてあなたは、こんないい声をもっておいでなのですか、その理由を私に聞かしてください。私も同じ鳥ですから、そして、あなたとは格別¹ちがっていないように思っています。だれがあなたに、こんないい音色を出すことを教えたのですか、私にきかせてください。私も、ぜひ、いつて教わってきますから。」といいました。

中略

「それほどまでに、あなたがおっしゃるなら、教えてあげます。あなたは、これから三年の間、荒い海の上で風に吹かれながら飛ぶ稽古^②をなさるのです。そして、それができるようになったら、日輪^Aのいるところを目がけて翔けて上がるのです。」
すずめは、感心して、美しいこまどりのいうことを聞いていました。

この話を黙って聞いていたからすは、鳴きながらどこへか飛び去りました。つづいてこまどりが、すずめを見下ろして、「また、お目にかかります。」と、一言残して、からすとは、反対の方向へ飛んでいってしまいました。

独り、木の枝に残されたすずめは、このとき決心いたしました。それからまもなく、すずめも、北をさして姿を消してしまつたのです。

あるときは、すずめはつばめにまじつて、岩に碎ける白い波を見下ろしながら、海の上を翔けりました。また、あるときはしらすぎにまじつて、風の吹く日に、そして、海の上が暴れて、どちらを見ても黒雲がわきたつような日に、波を切つて中空にひるがえることを学んだのです。

春、夏、秋、冬というふうには、三年の間、あわれなすずめは海の上で、しらすぎや、つばめや、また寒い国から渡ってきたいろいろな鳥などと、交わつて暮らしました。その間には、緑色に空が晴れて、その下に大きな海が、どさりどさりと物憂げに波を岸辺に打ち寄せて眠っているような、オダやかな日もあつたのです。そのような美しい景色は、とても野原や、林や、田圃などを飛んでいた時分には、すずめに見ることのできなかつたいい景色でありました。

また、夏の晩方には、日輪が真っ赤に、大きな火の球の転がるように海の中へ音もなく沈んでゆくこともありました。このとき、小さなすずめは、その昔、あの日輪に綱をつけて、からすや、こまどりや、いろいろの鳥らが引いて、深い暗い谷底から、日輪を引き上げたことを思い出しました。すると、こまどりの唄をうたつた、あのいい音色が耳に聞こえるような、また、笛や、太鼓や、笙の音色などが、五彩の美しい夕雲の中からわいて、海の上まで聞こえてくるような、なつかしい感じが

したのであります。

「あの太陽は、また、真つ暗な深い谷底に落ちてゆくようだ。どうして、それをだれも昔のように引き上げずとも、ひとりでに、朝になると上るのだろうか。それが不思議でならない。」と、すずめは思いました。

中略

ちょうど、このとき、いつかのからすにすずめは出あいました。

「からすさん、からすさん、いいところでお目にかかりました。お達者でなによりけっこうでございます。」と、すずめは呼びかけました。

からすは、頭をかしげて、じっとすずめを見ていましたが、

「ああ、いつかのすずめさんでしたか。たいへんにあなたの姿は変わったので、ちよいとわかりませんでした。翼の色がすっかり赤くなりましたね。」と、からすはいいました。

すずめは、驚いて、自分の身のまわりを見まわしながら、

「私が、赤くなったとおっしゃるのですか？」と聞き返しました。

「あなたには、それがわからないのですか。」と、からすは笑いました。

「なるほど、私の姿は変わりました。」

「あまり空を飛んで、日に焼けたんですよ。」と、からすはいいました。

すずめは、急に悲しそうな声を出して、

「私は、早く、太陽のおそばへゆきたいと思うんです。そして、なにかお役にたつことをして、りっぱな鳥となってきたいと思うのです。それで、いつかのこまどりを探しているのです。」と、答えました。

すると、からすはまた、からからと笑いました。

「おまえさんは、あのこまどりのいったことをほんとうにしていたのですか。もしそうだったらお気の毒なことです。あのとき、こまどりがいいかげんなことをいったのは、私をおそれて、私にへつらつて、あんなでたらしめのことをいったのです。私は、平常あ（へいぜい）のこまどりがおしゃべりなものですから、ひとついじめてやろうと思っていたのでした。なんで、私の先祖なにかが、日輪を綱でひいたものですか。ほんとうにこまどりは、うそをいうことの名人です。あなたは、いままで、それを信じていたのですか。」と、からすはあきれたような顔つきをしていいいました。

すずめは、二度びっくりしました。そして、長い三年の間の自分の苦労がむだであったことを、深く嘆き悲しみました。

「からすさん、私は、三年の間、空の上へ飛んでゆく稽古をしました。そして、いまは、雨にも風にもひるまぬ修業を積みました。しかし、それももう、なんの役にもたたなくなりましたのでしょうか。」と、すずめはいまにも泣き出しそうにいいました。

「どんな鳥でも、太陽の輝いているところまで上り得る鳥はありません。しかし、すずめさん、あなたは、その姿となってしまつては、ふたたびあなたの故郷へは帰れませんよ。だれもあなたを自分の仲間だと思つてくれるものはありますまいから。」と、からすはさも気の毒そうにいいました。

紅すずめは、だまつて、しばらく思案に暮れていましたが、やがて、南の故郷へは帰らずに、北をさして飛び去ってしまいました。すずめはしらすぎや、いわつばめのいるところへ、青い、青い海のある方へ帰つていったのです。

出典…小川未明「紅すずめ」青空文庫

問一 傍線部①③の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直せ。

問二 傍線部1～3の語句を言い換えた表現としてふさわしいものを次のア～エより一つずつ選べ。

1 格別

ア とりたてて

イ あまりにも

ウ どうにも

エ いつでも

2 へつらって

ア 嘘をついて

イ お世辞を言って

ウ 騙そうとして

エ 黙って

3 ひるまぬ

ア 気づかない

イ 芯の強い

ウ 負けない

エ 輝ける

問三 傍線部A「日輪」と同じ意味で使われている語句を、本文中より漢字2字で抜き出せ。

問題三

次の文章を読み、問いに答えよ。

フロイトはエディプス・コンプレックスを、もつとも根源的なものと考えたが、これに反対して、アドラーは彼独自の説をたて、フロイトからリハン^①していった。アドラーの周囲には社会主義者が多くいたせいもあって、早くから、社会的な観点を精神分析の考えの中に入れこもうとしたことが、特徴的である。

アドラーは、人間にとって性の衝動よりも、¹ を求める欲求のほうがより根源的であると考えた。彼は最初「器官劣等」という考え方を提出した。すなわち、人間は誰しもなんらかの劣等な身体器官をもち、それをホシヨウ^②して優越性を求めようとする衝動が、人間の心の中にはたらくと考えたのである。器官劣等の考えそのものは、アドラーは後年あまり強調しなくなったが、劣等感の存在は人間にとって根源的なものとして重要視した。

A、アドラーの考えは解りやすいところがある。先にあげた反抗的な中学生の例にしても、エディプス・コンプレックスなどを引っぱり出してきて説明しなくとも、彼がいままで「よい子」として、親や教師にジウヅク^③してきたことから、ここで自分の権威を得ようとして、強烈な反抗をしているのだ、と考えるほうが、解りやすいとも感じられる。

劣等感コンプレックスの概念は理解しやすいものだけに、ひろく一般に受け入れられた。しかし、それに伴って誤解も生じてきたのである。たとえば、生徒になにか劣等なところがあるとき、それを指摘することによって、劣等感コンプレックスをつくり出してはいけな²いと教師が考えて、その点について触れるのを避けるようなことである。たしかに算数ができない子²にも、お前は算数ができないからだめだと教師がいい、それによって生徒が傷つくことがある。そして、そのような傷が劣等感コンプレックスの形成に役立つこともある。しかし、コンプレックスというものは、感情のしがらみ³であり複合体である。劣等なことを劣等であると認識¹することは、コンプレックスと無関係なのである。というより、そのような認識こそコンプレックスを消滅させるための第一歩なのである。

考えてみると、われわれはいろいろと劣等な部分をもちながら、それが劣等感コンプレックスと関連しているものと、いな

いものがあることに気づかされる。語学ができないことは自分も認めていて、別になんとも感じないのに、数学ができないということにはこだわってしまう。他人から指摘されるといらいらしてしまう。後者のような場合はコンプレックスに関係しているのである。なにかに関して劣等であるということが、自分という存在の中に受け入れられているとき、それはコンプレックスをつくらない。

このような点から考えると、教師が生徒の劣等な点について、腹の中ではだめだと思いつつ、口先だけは逆のことを言ったり、何事もないように言ったりすると、それはむしろ、コンプレックスをつくりやすい条件となることが解る。子ども⁴の心⁴がその矛盾した二重の信号を無意識のうちにキャッチするとき、彼は自分の劣等性を、心の中にどう位置づけていいのか解らないのである。

とはいうものの、劣等であることを認識することは誰しも辛いことである。劣等の認識に伴う辛さや悲しみを共にしつつ、それをしてくれる人、あるいは、劣等性を認識することが、なんらその人の存在そのものをおとしめることでないことを確信できる人、そのような人⁵によってこそ、コンプレックスを解消するような劣等の認識が可能となるのであろう。

出典…河合隼雄 『無意識の構造』中公新書 一九七七年

問一 傍線部①②③のカタカナを漢字に直せ。

問二 劣等感の対義語は何か。解答欄に漢字で書け。

〔解答欄〕

□

感

問三 傍線部1「性の衝動よりも、を求める欲求」の部分のに入るものを次のうちから選び、番号で答えよ。

- 1 愛情
- 2 快楽
- 3 権力
- 4 美

問四 Aに入る語句を次のうちから選び、番号で答えよ。

- 1 たしかに
- 2 一方
- 3 しかし
- 4 ところが

問五 この文章では傍線部2「算数ができない子ども」に教師はどのように接するべきと述べているか。次のうちから選び、番号で答えよ。

- 1 算数ができないことに触れないようにする
- 2 算数ができないことは大問題だと教える
- 3 算数を徹底的に鍛え、苦手を克服させる
- 4 算数ができないことを認識させて、受け入れさせる

問六 傍線部3「しがらみ」とはこの文章の中ではどのような意味か。次のうちから選び、番号で答えよ。

- 1 絡み合い
- 2 起伏
- 3 爆発
- 4 読み合い

問七 傍線部4「矛盾した二重の信号」とは何か。次のうちから選び、番号で答えよ。

- 1 教師が生徒の劣等に対して、本音はだめだと思っっているのに、口では大した問題ではないという態度をとること
- 2 教師が生徒の劣等に対して、気にする感情と無視する感情を同時に持つこと
- 3 教師が生徒の劣等に対して、劣勢だと口では指摘しながら本音は大した問題ではないと思っっていること
- 4 教師が生徒の劣等に対して、傷つけないかどうかを気にして、隠そうとされていること

問八 傍線部5「劣等の認識が可能」になるにはどうすればよいか。次のうちから選び、番号で答えよ。

- 1 コンプレックスを持たせないように苦手なことには触れない
- 2 コンプレックスを他のものに向けるように何か始める
- 3 劣勢はその人の存在をおとしめるものではないと認識すること
- 4 劣勢を克服するために努力を続けること

問題四

次の文章を読み、問いに答えよ。

木の花は こきもうすきも紅梅。

桜は花びらおほきに葉の色こきが、枝ほそくて咲たる。藤の花は、しなひながく色こく咲たるいとめでたし。

四月のつごもり五月のついたちの比ほひ、橘の葉のこく青きに、花のいとしろうさきたるが、雨うちふりたるつとめてなど¹は、よになう心あるさまにおかし。花のなかより、こがねの玉かと見えて、いみじうあざやかに見えたるなど、朝露にぬれたる、あさ¹ぼ²らけの桜におとらず。郭公のよすが²とさへ思へばにや、猶さらにいふべうもあらず。

梨花の花、よにすさまじきものにて、ちかうもてなさず、はかなき文つけなどだにせず、愛敬をくれたる人の顔などを見ては、たとひにいふも、げに、葉の色よりはじめてあいなく見ゆるを、唐土には限なき物にて文にもつくる、猶さりとも様あらんと、せめて見れば、花びらのはしにおかしき匂ひこそ、心もとのふつきためれ。楊貴妃の、帝の御使にあひて、なきける貞ににせて、「梨花一枝春雨をおびたり」などいひたるは、²臃気²ならじと思ふに、猶いみじうめでたきことは、たぐひあらじと覚へたり。

桐の木の花、紫に咲たるは、なをおかしきに、葉のひろがりさまぞ、うたてこちたけれど、こと木どもとひとしういふべきにもあらず。唐土に³ことごとしき名つきたる鳥の、えりてこれにのみる覧、³いみじう心こと也。まいて琴につくりて、さまざまなる音のいでくるなどは、おかしなど世のつねにいふべくやはある。いみじうこそめでたけれ。

木のさまにくげなれど、棟の花、いとおかし。かれがれに、⁴さまことに咲て、かならず五月五日にあふも、おかし。

問一 次の1～3の内容が示す木の花の名前（漢字1字）を解答欄に書け。

- 1 葉が濃い青色で、白い花が咲く
- 2 日本と中国では、その花に対する評価が全く異なる
- 3 花房が長く、花の色が濃く咲く様が美しい

問二 波線部1～3の意味を考えて答えよ。

問三 傍線部1の意味として適当なものを次のうちから選び、記号で答えよ。

- ア 朝、霞がかかった中に咲く桜
- イ 朝、ほのぼのと明るくなるころの桜
- ウ 朝、光の中ではかなげに咲く桜

問四 傍線部2の意味として適当なものを次のうちから選び、記号で答えよ。

- ア ありきたりではないだろうと
- イ 悲しげな様子ではないだろうと
- ウ はかなげな趣ではないだろうと

問五 傍線部3の意味として適当なものを次のうちから選び、記号で答えよ。

- ア 大変神秘的な心持ちになる
- イ 大変楽しい心地がする
- ウ 大変格別な感じがする

問六 傍線部4の意味として適当なものを次のうちから選び、記号で答えよ。

- ア 見苦しいほどに変わった風情に咲いて
- イ しなびたように変わった風情に咲いて
- ウ それぞれの花が変わった風情に咲いて